上高井教育会報

第115号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　堀内文夫
編集人　会報編集委員長　西原和幸
印刷所　須坂新聞社

研鑽所感

赤堀昭三

作品を師匠に見ていただいていたとき、同門のAさんが時候の挨拶に来合わせた。

「A君、此の頃、書いたものの持ってこないね。どうしました」

と、師匠が尋ねた。

「はい、○○先生に見ていただいています。」

○○先生は師匠の高弟である。

「そう。いいでしょう。しかし、○○さんに見てもらっていたら、A君はいくら書いても、○○さんより上に出ないんだよ」

私は側で、師匠のこの言葉から師匠の厳とした気迫を感じていた。

○　○

初心者のうちは、作品を書こうとするとき、先ず手本をいただき、それを倣う。沢山書き倣う。行草の手本の場合その楷や字義すら知らずに書く。いや、知ろうとしない無知のままに書く。倣うことに意が向いているだけで、手本に対して、自ら思うこと、働きかけること、自己の内面で創ることがないのである。

こんな書き方（研修といってもよい）ではだめだと早く気づかねばならないのだが、そうはいかないのが常なのだ。

このことは、私たちの日々の実践、事例研究についても言える。

事例研究について、安良岡康作先生は「上高井教育二十一世紀の展望」への寄稿のなかで、「事例研究は研究にあらず、とわたくしは考えるのである。（略）わたくしは、上高井教育会々員に期待したいのは、毎日毎時の教室における実践を通して、その実践を導くに足る原理と方法を発見し、創造する道を歩んでいただきたいことである。（略）」と述べ、研修への在り方を示唆している。目前の実践に溺れ易い大きな弊めであろう。

学んで思わざるは罔し、思うて学ばざるは殆し、という教えがある。まさに、研修者としての初心だと思うのです。

○　○

時に、「おれはだめだ。もう一度、初めからやりなおさなければだめだ」という奮起の念にかられる。鮮烈な作品にふれたとき、着作に心を揺さぶられたときにそうだ。自分の作品の未熟さ、線質の貧弱さに、そして、曲がりなりにも、それを創り出してきた過程をも悔やむのである。

もう一度、初めからやりなおそう、という気持ちは此の頃ますます強い。そして、基本的なこと、初歩的だと思われる練習に、これでもか、これでもかと対峙する。そんな中で、自分の奢りが洗われるような思いがしてくる。

初心不可忘。此句、三ケ条、口伝在。是非初心不可忘。時々初心不可忘。老後初心不可忘。此三、能々口伝可為。

西尾実先生の書簡集の口絵のなかに、先生の筆になる軸「時々初心不可忘」があった。

研修の道は遠く深く、しかも生きる果ては限られている。

しかし、研修者は常に初心にかえりたい。

○　○

「本を読まぬ教師ではだめだ。それも、インキの匂いのするような流行の新刊書ばかりを読むのではなく、古典を読め」と先輩に叱られた。豁然と目の前がひらけることはなくても、だめだと思った心を癒してくれるものにぶつかる。先輩のおひとり北村堯先生は、言行録「壮心不已」の一文「うしろ姿」でこう述べている。

（略）その瞬間全身が急激に硬直するのを感じた。そうだ。勉強しないからだ。ここ十日間ばかりいそがしさにまぎれて本らしい本を読まないのだ。心の糧が尽きていたのだ。これではいけない。どんな事があろうとも、どんなに苦しくとも心の糧だけは満たさねばならない。かくも鋭敏に心の内が現れるものだろうか。恐しい事だ。これがその朝の私のうしろ姿だったのだ。」

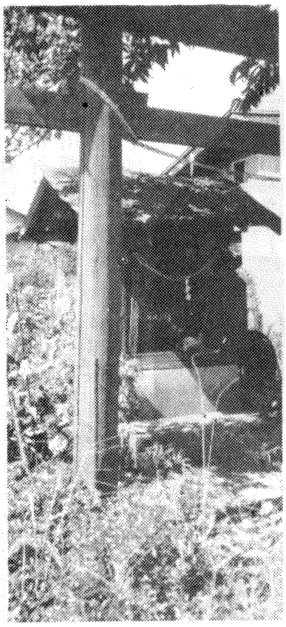
教育会だより

7・10　教研分科会長・司会者会（相森中学校）
7・24　第五回代議員会
7・29　研究委員会(2)
8・7　上高井教育七団体連絡会結成会（上高井教育会館）
9・8　教研中間連絡会（相森中学校）
9・13　子どもたちの健全育成をすすめる集会（須坂小学校）
9・18　第六回代議員会、信教各種研究調査編集委員会中間報告会（第一回）
10・8　上高井教育研究集会（相森中学校）
10・12　郡市PTA連合会研究集会（須坂小学校）
10・21　教育課程研究協議会

郷土の文化財 ⑦④

稲荷神社の幟

高橋町　稲荷神社



「福澤潤千載」「威光被萬民」と書かれたこの幟は、大正十年、地元の真木序に揮毫を依頼して当社に奉献された。（真木序＝大正十三年十月二十七日没。享年五十六才。日滝小学校に四十年間奉職。）長さ四メートル八〇、幅六十三センチメートルの木綿地で六メートル程の棹に掲げられている。

この稲荷神社は八木沢川の屈折点の洪水による危険地点にある。ところが、数度の洪水の際にもその難をのがれているので、幟を奉献することになったのだという。以来、毎年、春四月十四日、秋九月二十五日の二回、参道入口に掲揚されている。管理は稲荷講、小林忠重氏。（横山）

夏季研修会に参加して

―― 今年度の夏休みも、多数の先生方が研修会、講習会等に参加されました。その中から得られました貴重な体験や感想をお寄せいただきました。 ――

夏季研修「哲学」
個への沈潜と浄慧

松田悦司

梅雨明けが遅れたせいか会館裏の欅の大樹の蟬にも悩まされず、恒例の夏季研修に参加できました。

講師　西谷裕作先生（京大）
演題　ニーチェの〝善悪の彼岸〟〝道徳の系譜〟

昨年度は先生のご病気で中止されたためか、本年度は二年分の受講者で三十数名もの多数でした。普段からの活字離れと雑念に追い回されている私には、一時のオアシスでした。概要を記してみます。

○「善と悪」「良いと悪い」はキリスト教の心理学を含んでいる。即ち、ここでは「善悪」という従来の道徳的価値判断の起源を暴き出すことが中心問題であって、この勿体らしい判断方式の正体はキリスト教的な奴隷人間の怨みっぽく悪賢い「反感（ルサンチマン）」の精神から生まれた畸形児でその本質から言えば古代的な貴族人間に対する一つの反抗運動であり、貴族的価値判断の支配に対する大規模な暴動にほかならない。

○「負い目」「良心の疚しさ」は良心の心理学を呈示する。「良心」と呼ばれているものは普通にそう信じられているように「人間の内なる神の声」なのではない。所謂良心の創始者は却って外に向かって放出することがもはやできなくなった後逆転して内に向かう残忍性の本能である。そしてこの内攻的な残忍性は文化の地盤を形造る最も古い、最も無視しがたい。しかも最も激しく人間を痛めつける要素の一つとして、ここで初めて白日の下に引き出される。人々はそれをより厳しい時代においても近代的な軟弱化のために敢えて認めることをしなかった。ただ真理に対する鋭い愛のみがこの事実を発見し、確信するのである。

○禁欲主義的理想は何を意味するかは禁欲者の心理学とも呼ばれるべきものである。ニーチェはここで禁欲主義的理想即ち僧職者的理想の巨怪な力はどこに由来するのかという問いに答えを与えようと試みる。禁欲主義的理想は何にも増して有害な理想であり終末への意志であり無への意志である。それにも拘らずこのデカダンスの理想が従来あのようにひとり巨権を握って来たのは何故であるか。それはこの理想がこれまでは唯一の理想であって全く競争相手がなく反対の理想が欠けていたからである。一言で尽くせば人間は欲しないよりはまだしも無を欲する――詰より良いものがないための間に合わせに過ぎないというのがニーチェの答えであった。

この研修に参加して毎田周一先生の一文を思い出す。

修養

私は非倫を行ずることを
恥づるよりも――
むしろ、非倫に拘泥し
自己生命の自由な発露を抑圧
する傾向をこそ恥ぢます。

（小山小）

合掌造りの里・白川郷
五箇山郷への旅に参加して

井上光由

今年の地歴同好会夏季巡検は、合掌造りの里、飛騨白川郷・越中五箇山郷を訪ねた。例年のように東京学芸大教授市川健夫先生を講師に、二名の女性を交える先生方が二泊三日の巡検の旅を共にした。

八月二日早朝、須坂を発ち野麦峠越えのコースで飛騨に入った。峠では乗鞍岳が一面の熊笹のむこうに雄大な山容を見せてくれた。高山市では出格子のある古い構えの町屋が軒を連ねる三之町を歩いたが、杉玉を下げた造り酒屋や古いのれんを下げた民芸品、絵馬を売る店に往時の生活が偲ばれた。

高山市から小鳥峠、松の木峠を越えて白川郷に入った。道は庄川の深い谷を南から北へ点在する白川郷と五箇山郷をつないで砺波平野に出る。この地はかつては代表的な隔絶山村として知られ、今も谷の斜面に焼畑耕作の跡が認められる。しかし、何よりもこの白川郷の地域性を特徴づけているのが合掌造りの民家で貴重な文代財として大切に保存されている。フィル式ダムの御母衣湖を過ぎて、夕刻にこの谷最大の合掌造り集落白川村荻町に着き、昨春五十年ぶりに屋根をふき替えたという民宿に宿をとった。

翌朝、典型的な合掌造りの明善寺庫裡を見学した。六十度の急勾配の屋根をのせる五階建ての壮大な造りで、二階以上は正三角形の屋根裏になっていて、二～三階には細木の簀の子が張られ、古い民具類が陳列されていた。そこは一般の民家では篠竹を編んだ簀の子を敷き、養蚕の作業場に使われていた。合掌造りの特徴は釘やかすがいを一切使わないことである。長尺材を結束するのに木の楔とネソと呼ばれる蔓木とわら縄で丁寧に締め上げている。この独特な形態・構造を持つ合掌造り民家は江戸時代中期から建てられてきたといわれるが、市川先生のお話では、当時盛んになってきた養蚕に広い屋根裏が利用できること、屋根葺き材料の茅が豊富に得られること、二階以上の屋根葺き作業は村人だけの結だけで賄うことができたからだという。隔絶した山間僻地の厳しい自然と苛酷な社会的経済的な条件が生み出した固有の文化遺産として、将来とも大切に保存してほしい建造物である。

二泊目の宿も五箇山郷相倉の合掌民宿にとり、翌四日、五箇山トンネルを抜けて散村集落で知られる砺波平野に下った。屋敷林に囲まれて点在する農家を左右に見ながら、井波彫刻・欄間作りと瑞泉寺門前町で知られる井波町を尋ね、欄間・獅子頭・天神像など優れた工芸品を見て、その貞抜した技量に感服した。三日間、伝統的建造物や工芸品にじかに触れて、収穫の多い濃密な研修の旅であった。

（須坂小）

夏季音楽講習会に参加して

藤森淳子

夏休みに入った七月二十八日に、東京神楽坂にある音楽の友ホールで開かれたNHKコンクールの課題曲講習会に参加する機会を得た。

こうした講習会の時、いつも感じることは、指導者の人間性の豊かさである。教師は役者であることも必要であるといわれるが、話術・表情・体の動きにも人をひきつける力がありそうした面でも大いに学ばせていただいた。

まず午前中は、『合唱であそぼう』のテーマで、小山章三先生から実技を交えてのご指導を受けた。その中で、心に残ったいくつかを書きとめてみたい。

音楽は人間を一つのものにすることができる。歌わなくてはいられない雰囲気を作り子どもの中に入っていかなければならない。また、「うたう」の語源である、拍ち合う訴うに思いを向けたい。さらに、楽しそうではなく、楽しく歌えるようにしたい。そのためには、指導者自身がもっと楽しみ、音楽しなければならないというのである。

合唱指導のみならず、共に生き、共に育てる教育においては、次回の学習が子どもたちにとっても、自らもが待ち遠しくなるようにというお話があり、本当にそうありたいものだと考えさせられた。

午後は、西六郷少年少女合唱団をモデルに、鎌田典三郎先生から、『美しいひびきを求めて』のテーマで、多くの事項を曲の中で、歌声を通して指導して頂いた。

合唱団の子どもたちは待つ間も姿勢を崩さず、歌唱は生き生きと音楽性の豊かさを感じさせ、指揮に添って自在であった。その心の中からわき出るような自信に満ちた姿に圧倒された。指導者の技能や教授法に加え、自らの感性を信じて情熱を持って、子どもたちを導いておられるのだろうと察せられた。そうして与えられた自信は、次に子どもたち自身で動き出す基となったのであろう。最低限必要な技術は身についたものとなり潜んでいた力が息づき、輝きとなっていた。

この子たちの持つ自信を与えてあげられる指導者でありたいなあと感じさせられた有意義なひとときであった。

（栗ガ丘小）

教員生活半年を経過して

小平知行

まだ残暑のなごりはありますが朝夕は既に膚寒い季節となり秋の気配を感じます。自分が春・夏と一年の半分を過ごしてきたのかと思うと時間の速さに今さらながら驚いてしまいます。

振り返ってみますと最初の自分は何が何だかわからず右往左往していた気がします。もっとも今でもわからないことばかりでまわりの先生方に御迷惑ばかりかけています。しかし、それでも自分の心の中に何か変化しつつあるものを感じます。

例えば生徒との会話をとっても四月の頃は声も小さく遠慮がちでぎくしゃくした感じのものでした。最近は少しずつ生徒の本音も聞けるようになりました。また、自然にほめたり、叱ったりもできるようになったと思います。

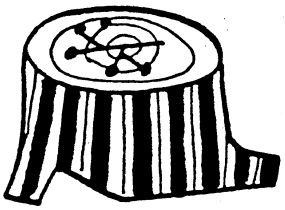
さらに自分の仕事の見通しが少しずつ立つようになったことが大きな変化です。言いかえれば心のゆとりができたとでも言うのでしょうか。別の角度から見れば経験を少し積んだからだと思います。他の先生方から見れば小さな進歩ですが私自身では大きな進歩なのです。

これはまわりの先生方の叱咤激励や温かい助言があったからです。授業を見ていただいたり、相談にのっていただいたり、わからないところを教えてもらえたからです。

さて授業の方ですが、毎日があっという間に終わり、いつも不満ばかりが残ります。今日はここがいけなかった、ああすればよかったとそう思う日々です。でもそれが翌日への意欲にもなります。生徒にとってはその一時間が掛替えのないものだと思うと中途半ぱなことはできないぞと強く思います。

そのためにも教材研究等をしなければと思うのですが、忙しさを理由に怠けたことはなかったかと省みると無きにしもあらずです。中学校の恩師が「教師が骨さえ惜しまなければいい子が育つ」という言葉を下さいました。胸に刻み込んでおこうと思います。

この半年間で自分も高山中の一員になったような気がします。反面、慣れていく自分に不安も感じます。まだまだ未熟者。いつも学ぶ姿勢で自分に厳しく生徒に温かくありたいと思います。（高山中）



学校づくり ⑫
郷土を愛し豊かな心を

豊洲小学校

本校は明治二十三年の創立以来百年を迎えようとしています。初代校長は清水勝造先生（豊洲の生まれ）で二十五年間本校の校長として務められるとともに、豊洲地区の教育に生涯を捧げられ、その頌徳碑の碑文の終りに、時の信教会長宮沢佐源次先生が、叙銘日「信山峻秀　信水清冽　成徳仰高　洪恵流水」と記されています。

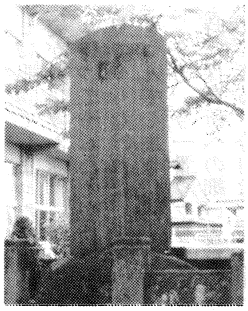
清水先生の精神が現在の豊洲小学校の基本目標「豊かな心をもち本気でとりくむ子」に継承されており、本年度の学校経営の重点は、この精神を更に深化発展させるために

一、基礎基本を大切にし、本気で取り組み、自ら追求する子どもの育成

二、共存の感情に支えられた人間関係を大切に、礼儀正しい子どもの育成

三、自然や文化を大切に、郷土を愛する子どもの育成

四、人・命を大切にする子どもの育成



本年は特に「地域・郷土をもとにした身近な素材の教材化」を考えて取り組んでいる。教科の時間と学校裁量の時間（豊洲の時間）とを結びつけ学校菜園、豊洲の産業、歴史等と関連づけを強くして行ってきている。一年では、トウモロコシさんのぼうけんのお話づくり。二年では、小麦づくりからパンづくり。三年はリンゴの木を借用してのリンゴづくり。四年生では、豊洲の洪水、五・六年は、歴史・産業と結びつけたり、児童会では、よもぎ文庫、リンゴの剪定枝集めとそれを使っての焼きいも大会等々。（荒井）

火ばち談議

花に寄せて

丸田鶴弥

今にも雨が降り出しそうな暗い舎内の朝、廊下の扉越しに見える校長室の卓上に何となくかわった花が活けてある。近くに寄ってみると、石楠花の葉を大きくし、椿の葉の艶を加えたような革質の数枚の葉に囲まれるようにして、径12～13㎝の純白の花が一輪顔を覗かせていた。初めて見る花である。匂いは柑橘類に似て香しい。

暗緑色でありながら僅かな光をも反射して艶を誇る葉を押しのけて開いた純白の花弁は周りの暗さと余りにも対象的で、そこだけが別世界を創り出している。これも未だ見たことがない月下美人もかくあろうか。これ程豪快で、印象的な花を見るのは初めてである。事典では、北西アメリカが原産とある。気候帯は日本とほぼ同じだが、雨量が極端に少ない地域であり、彼地にしてこの花産めりと勝手に納得したが、これ程存在感の強い花が、気を落ちつけて改めて見ると周囲のたたずまいに調和しているのも不思議だ。これをこのまま我が埴生の宿に移し変えたらどう映るだろうかと思いをめぐらした。

梅雨の代表的な花は紫陽花だ。小さな四片の花弁が集合して大きな半球を形作り、色も何回か化粧直しをしていくところが日本的で風情がある。まして雨にぬれ水滴に光る姿は何とも言えない美しさを感じる。こんな葉裏にかたつむりの一匹でもいたら最高である。こんな花なのに子どもがせっかく持ってきてくれたのを教室の窓辺の陽の当たる所に置いたら一日でなえてしまった。申訳けなく残念だった。

泰山木は単一で原色的であり大陸的である。紫陽花は小花の集合であり、色が複雑な変化を示し、微妙な美しさを示すところが東洋的である。艶やかに咲き誇った泰山木も次の朝にはなかった。花の命はみじかい。（旭ケ丘小学校）

小さな姿から学ぶこと

渡辺綾子

犬のぬいぐるみ　ママー人形　セルロイドのキューピー　そして　すずにタンバリン…次々とおもちゃ箱から持ち出しては、布団にならべる娘。我が家の就寝風景だ。たくさんならんだおもちゃの横で、タオルケットをかぶって満足気な娘こそ、渡辺家の主人公「春菜」である。

昭和六十年二月十五日生

両親に似ず、少々やせぎみのノッポさん。だれに似たのか負けん気だけは強く、自分がこうと決めたら、絶対ゆずらない。水が欲しい時は、水を飲むまで、何も食べない。自分の決めたコップでないと、飲まない。

今からこんなんでいいのかしら、と心配するのは母親。〝やさしく、春のように暖かい女の子に〟の願いをくつがえされたようで、少し心配。でも保育所の先生も、主人も「自分の意志がはっきりしていていい。」と言っている。

意志がねえ…なるほど、そういう見方もあるなあ。そういえば、今日の休み時間、自由遊びでの○君。みんながキックベースやっていたのに、仲間に入らなかった。○君も意志が強いということかしら。協調性がない、わがまま、自分勝手。といやなことばかり見つけていた自分がフトなさけなくなる。意志が強い。こんなことばもあてはまるのか。

朝、忙しい一日が始まる。時間はもう七時五十分。

「春菜、行こう！」

なかなか動かない。茶の間で何やらやっている。こちらは焦ってくる。茶の間に行って見ると……今まで見ていた絵本を、机の上にきれいに重ねている。〝ドキリ〟ただ遅くなっていたのではなかったのか。そういえば学校でもこんなことがあったなあ。頭ごなしに叱ってしまった○さんの姿が目に浮かぶ。

待ってやらなくては、よく見てやらなければ、大切な芽をつんでしまう。

夕方、今一番ワクワクする時。保育所への細い道をむかえに走る。今日はどんな顔でむかえてくれるかな。どんなことを教えてくれるかな。

（高甫小）

生徒に教わりながら

佐藤昭二

社会教育に関係をした三年間を含めて九年ぶりに中学校での教師生活をするようになりました。

十年一昔と言いますが現在の目まぐるしい社会では十年二昔と考えた方がよいでしょう。毎日が生徒に教わることばかりの連続です。

（その一）

グラウンドに出て集合の笛を吹く。生徒はただこちらを見ているだけ…「どこの場所にどんな隊型で集合するのかわからねえのに、笛だけ吹かれても集まれねえよなあ……」とは生徒の弁……一本やられました。

（その二）

頭にきて「正座」とどなりつける。……生徒は皆地面に腰をおろして安座する。「正座とは、おすわりのことだ。」……しぶしぶ座りなおした生徒いわく「こんな座り方をしたのは何年ぶりかなあ。」……ギャフン!! どうせ私は古い人間なんだよ！

（その三）

給食時「先生、一人分足りません。先生の分はどうしたらよいですか？」……私の前には給食がない。……空腹をかかえて「馬鹿野郎！勝手にしろ。親の顔が見てえや。」……生徒いわく「俺達は育ち盛りだもんなあ」……「いいさ俺はどうせ下り坂の人生だ。」と一人つぶやく。

（その四）

家庭訪問で「先生、これ私がつくった特別のプリンです。是非食べてください。」と生徒手づくりの特製プリンが出る。「やわらかくて、おいしそうだね。」「年寄りにはやわらかい方がいいと思って…。」即座に「はい、ごちそうさま、ではさようなら。」…ドッコイショ。

（その五）

学級園の草とりで「雑草を一本残らずぬいてきれいにしよう。」と言うと「先生、この雑草には花がついています。雑草にも命があるのだから花の咲き終るまで待ちましょう。」の声。「そうだね、いいところに気がついたね、そうしよう。」……かくして我がクラスの学級園は今日も雑草園の様相となる。生徒達が着実に向上している姿を見るにつけ、「よし俺も!!」と意気込んでいる毎日なのです。生徒に教わっている毎日です。（墨坂中）

編集後記

「教育は教師の生命」教育実践の糧を求め、研修に参加された会員の玉稿を編集しました。お忙しい中、有難うございました。（田中・横山）